

# 中讃地区をナスの産地に～若手生産者がナスを作りたいくなる環境を目指して～

## ■ 中讃管内若手ナス生産者 ■

(中讃農業改良普及センター 小河原良文、○津田遼平)

### ●対象の概要

中讃地域では、近年、特に飯南地区を中心に夏の栽培品目としてナスを選択する若手生産者が増えており、栽培面積の拡大が進んでいる。

現在、中讃地域では、62名の生産者により、5.8haのは場でナスの栽培が行われており、生産者は、4つある部会や研究会のいずれかに属して、出荷を行っている。

今年度、新規生産者が5名増え、その半数以上が40歳以下の若手生産者であった。若手生産者の多くから、向上心が伺え産地に活気を与える要因の1つとなっている。

### ●課題を取り上げた理由

新規にナスの栽培を始める若手生産者の指導する中で、ナスの栽培は剪定作業をはじめとする管理方法が分かりにくいとの声が多く聞かれた。

また、平成29年から3名の生産者により、管内では初めてとなるナス施設栽培の取り組みが始まったが、病害対策や安定生産の面で多くの課題が残されている。

来年度、新たに1名の生産者が、さらなるナスの栽培技術習得や出荷期間の延長を目的に施設栽培に取り組むことから、経営の安定や収益性の向上に向け、安定した収量を確保するための検討が急務と考えられた。

### ●普及活動の経過

#### 1 既存生産者に対する収量向上に向けた活動

##### (1) 栽培のポイントを絞った講習会の開催と情報提供

夏秋ナスの栽培に当たって、栽培開始前の12月と4月に栽培講習会（3カ所延べ5回）を行い、基本的な栽培や防除方法の説明とともに、現在の気象状況や前年の栽培管理等から特に注意すべきポイントに留意した指導に努めた。

栽培期間中には、発生が懸念される病害について、巡回から得られた知見を基に注意喚起を行い、生産者が速やかに対処できる環境づくり

に努めた。今年度は、水稻での発生が多く、稲刈り後、ナスへの影響が懸念されたカメムシや秋口の乾燥から多発が予想されたうどんこ病対策について情報提供を行った。9月上旬に注意喚起の資料を作成し、生産者に対策の周知徹底を呼びかけた。



栽培講習会の様子

#### (2) 先進地視察の実施

ナスは栽培管理に多くの労力を要するため、作業の省力化を考える生産者が多かったことから、省力化技術の習得を目的とした先進地視察を行った。

##### ①天敵を用いた生物的防除試験の状況

2月 高知県農業試験場

##### ②灌水作業の省力化のための拍動灌水装置の利用

8月 岡山県有漢町



県外視察の様子（岡山県有漢町）

2 新規生産者に対する収量確保に向けた活動  
 新規生産者に対しては、巡回指導を中心に行った。指導の際には、実際に作業を行いながら説明するとともに、特に要望のあったせん定方法については詳細な資料を配布する等工夫に努めた。

また、関係機関と連携して、熟練の生産者も交えた10余名で互いのほ場視察を行い、先輩生産者との交流を促進し、新規栽培者がアドバイスを受けられるような環境づくりを行った。

3 施設栽培の収量安定に向けた活動

施設栽培における収量低下の主な要因は、灰色かび病の発生である。灰色かび病は、施設内の環境制御が大きく関係していることから、最適な環境条件を把握するため、施設に温湿度計を設置し、データ分析を行った。

また、生産者に対して、前年度の栽培の振り返りによる改善点や、温湿度計のデータ分析に基づく栽培管理について協議を行った。

## ●普及活動の成果

1 ポイントを絞った講習会や情報提供等きめ細かな活動を通じた効果の「見える化」

重点となる管理のポイントを絞った講習会や情報提供、巡回指導の総合的な展開により、生産者の多くが目標とする収量を確保することができた。

年々、栽培戸数や面積は増加しており(表-1)、効率的な指導が必要であったが、特に本年は、発生予察に基づく病害虫(カメムシ、うどんこ病)対策として、注意喚起の資料掲示や説明を行い、被害の軽減を図ることができた。

また先進地視察後には、学んだ技術を基に、自らのほ場で工夫できる方法がないか検討する生産者が現れる等「自分で考える農家」の育成に繋がった。

表-1 ナス栽培戸数(令和元年度)

年度	栽培戸数(戸)	栽培面積(a)
29	46	520
30	57	540
31	62	580

2 新規生産者に対する重点指導を通じた収量の確保

新規生産者に対するきめ細やかな巡回指導や熟練生産者との交流は、自ら考え学ぶ点も多く、栽培する上で、良い刺激になったと感じている。

特に栽培管理の中で難しいとされる誘引や整枝作業を重点に指導を行った結果、5名の平均反収は5.6tと全体平均の4.4tを超える良好な成績となった(表-2)。

表-2 新規生産者の平均収量(/10a)

部会・研究会の平均	4.4t
新規生産者	5.6t(5名平均)

3 施設での高収益を目指す生産者の増加

施設栽培における環境制御について、生産者を交えて協議を行うことで栽培に対する意識統一と情報の共有を促した。

管内の露地と施設を組み合わせ、高い収益を上げている生産者を目標に、次年度は1名の若手生産者が県の補助事業を活用し、施設を建てる予定となっており、次年度も栽培面積が増加する見込みである。

## ●今後の普及活動の課題

1 次代を担う生産者の育成、技術継承に向けた環境づくり

ナスは、夏場の栽培品目の中では、比較的単価が安定(平均280円/kg)していることから、若手を中心に栽培面積は年々拡大している。

その一方で、新規生産者からは、栽培管理が難しく、資料の説明だけでは分かりにくいとの意見が寄せられた。本年は、新規生産者を中心にした巡回指導を通じて、実際に整枝作業を行い、一定の成果を得ることができた。今後も、巡回指導の中で管理を的確に行うことを重ねつつ、連作圃場で懸念される病害虫対策等の説明を行い、収量の確保・向上を図る必要がある。

また、熟練生産者の管理や栽培に対する考え等が伝わるよう、互いが交流できる環境づくりを進め、技術継承と人材の育成を図ることで、ナス産地の拡大に取り組む必要がある。

2 施設栽培の確立

管内の施設栽培においては、環境制御や病害虫防除の面で明確な基準が設けられていないことから、今後も最適な環境条件や病害虫防除対策の検討を行い、更なる栽培方法を確立していくこととしている。